◇動　向◇

日本遺産「里沼」認定と沼辺文化を活かした新しいまちづくり

館林市教育委員会文化振興課
（館林市日本遺産プロジェクト）

はじめに

令和元年（二〇一九）五月二十日、館林市のストーリー「里沼（SATO-NUMA）―『祈り』『実り』『守り』の沼が磨き上げた館林の沼辺文化―」が、文化庁「日本遺産」に認定された。市域に点在する沼々と館林の人々が共生しながら現在まで繋いできた歴史・文化、暮らしや生業を「里沼」と表現し、館林特有の沼辺文化を世界に発信することにより、地域住民の郷土愛醸成や、地場産業の復興、着地型観光の振興を図る取組みが始まっている。

本稿では、日本遺産認定への格闘の記録と、「里沼」ストーリーの特徴、そして認定から一年が経過した館林市「里沼」の事業展開を記す。

一　日本遺産とは？

館林市「里沼」の認定までのプロセスの前段として、まず文化庁「日本遺産」について説明したい。「日本遺産」とは、平成二十七年度に文化庁が創設した制度であり、地域の歴史的魅力や特色を通じて、我が国の文化や伝統を語るストーリーを、日本遺産として認定するものである。従来の文化財行政が、個々の歴史的遺産を点として指定することで保存してきたのに対して、この日本遺産は、点在する個々の遺産をストーリーとして繋ぐことで、面的活用・魅力発信することを目的としている（次頁　図1参照）。

日本遺産の審査・認定は年に一回行われる。日本遺産には二つの類型があり、複数の市町村にまたがってストーリーが展開される「シリアル型」と単一の市町村でストーリーが完

結する「地域型」がある。「地域型」で申請をする場合は、市町村において歴史文化基本構想または歴史的風致維持向上計画の策定が済んでいること、もしくは世界文化遺産に関する構成資産を有していることが条件とされている。また、ストーリーを語る上で不可欠な文化財群には、地域に受け継がれている有形・無形のあらゆる文化財を対象とすることができ、未指定の文化財も含めることができるが、国指定・選定の文化財を必ずひとつは含める必要がある。

認定基準は、①ストーリーの内容が、当該地域の際立った歴史的特徴・特色を示すものであり、かつ我が国の魅力を十分に伝えるものになっていること、②日本遺産という資源を活かした地域づくりについての将来像（ビジョン）と、実現に向けた具体的な方策が適切に示されていること、③ストーリーの国内外への戦略的・効果的な発信など、日本遺産を通した地域活性化の推進が可能となる体制が整備されていること、という三つである。

図１　日本遺産制度概念図（文化庁 HP より）

審査にあたっては、予め文化庁内にて申請書類がランク付けをされたのち、文化庁に組織された外部有識者で構成される「日本遺産審査委員会」の審査結果を踏まえたうえで認定される。この委員会については、毎年審査委員の入れ替わりがあるものの、文化財、世界遺産、国文学、都市計画などの学識経験者のほかに、観光庁長官や観光を専門とする有識者、外国人、漫画家、民間事業者など、合計約一〇名が委員を務め、観光やインバウンド、サブカルチャーなども重要な観点である。

日本遺産は、国内の地域性豊かなストーリーを東京オリンピック・パラリンピックが開催される予定であった今年（二〇二〇）までに一〇〇件を認定し、地域活性化とインバウンド（外国人観光客による消費活動）増加を目指す取組みだが、今年六月十九日に最後の二一件の認定が発表されたことで合計一〇四件が存在することになった。例年七〇～八〇件ほどのス

トーリーが申請されるが、認定は平均一五件程度であり、認定を勝ち取るのは実は至難の業である。

日本遺産は、認定件数を一定程度に限っているため、ブランド力を持つことができるというメリットがある。対外的には、日本遺産に認定されることで地域の認知度が高まるとともに、インバウンド事業をはじめとする観光振興の更なる発展をもたらす起爆剤となるほか、認定された文化財をはじめとした個々の構成資産の存在価値を高めることに繋がる。また、対内的には、地元住民が今まで見過ごしていた、普段の暮らしの中において、自分たちの地域の魅力を再認識し、文化財などの資産を保全・活用することを促し、地域活性化や魅力あるまちづくりへの気運の醸成へと繋げることができる点もメリットである。

二　群馬県における認定状況

群馬県内や近隣県の認定について述べるが、群馬県内では平成二十七年四月二十四日の日本遺産第一回認定時に、群馬県が調整役となり、桐生市・甘楽町・中之条町・片品村の各構成文化財を繋いだストーリー「かかあ天下―ぐんまの絹物語―」がシリアル型で認定を受けている。館林市「里沼」は群馬県内で二件目の認定になる。

群馬県よりも少し広域で見ると、平成二十七年度に栃木県足利市と水戸市・備前市（岡山県）・日田市（大分県）のストーリー「近世日本の教育遺産群―学ぶ心・礼節の本源―」（シリアル型）、平成二十九年度に埼玉県行田市が「和装文化の足元を支え続ける足袋蔵のまち行田」（地域型）で認定を受けている。平成三十年度は、栃木県で宇都宮市が「地下迷宮の秘密を探る旅～大谷石文化が息づくまち宇都宮～」（地域型）、那須塩原市・矢板市・大田原市・那須町が「貴族文化が描いた未来～那須野が原開拓浪漫譚～」で認定された。

過年度の申請歴を見ると、群馬県内では甘楽町が国指定名勝「楽山園」を中心としたストーリーで複数回（平成二十七年度、二十八年度、三十年度）にわたって申請しているが、認定には届かなかった。また、館林市に隣接する板倉町が、平成二十九年度、平成三十年度にかけて、栃木県・茨城県・埼玉県の自治体とともに、共有する渡良瀬遊水地と足尾鉱毒事件の活動家・田中正造をテーマとしてシリアル型での申請を行っているが、残念ながら認定までは至らなかった。

館林市「里沼」はたった一回目の挑戦でストレートに認定を勝ち取ったが、日本国内の並み居る強敵が地域の自慢のストーリーを掲げて挑戦するなかで、初回のアタックでそのまま勝利を手にすることは稀なケースなのである。

三　ストーリー構築までの格闘

本章では、館林市「里沼」が日本遺産認定を受けるまでのプロセスは、際立った特徴が見い出せずに地域の歴史や文化財を活かしたまちづくりや観光振興が進まない自治体にとって、一筋の光を与える可能性があるのではないか。その思いから、認定までの格闘の記録を記したい。

館林市が日本遺産を目指したきっかけは、平成二十九年十一月に国名勝「躑躅ヶ岡」のつつじ古木群保護を目的とした市民運動として「館林つつじサポーターズ倶樂部」が設立されたことが発端である。同倶樂部は設立時に二大目標を掲げたが、一つが「つつじの保護育成」、もう一つが『躑躅ヶ岡』の日本遺産認定」だったのである。この目標達成のため、所管である市つつじが岡公園課は精力的に動き、日本遺産認定地の視察を幾度も実施し、文化庁の日本遺産担当者とも協議を行った。

しかし、この意気込みをくじくように文化庁からは「つつじだけでは日本遺産認定は難しい」との厳しい指摘を受けた。文化庁「日本遺産」制度には、指定・未指定の枠を超えて、地域の文化財を丁寧に掘り下げることによる新たな地域ストーリーを発見するという文化財分野の命題と、旧来型の局所的観光ではなく、地域全体における通年での回遊性向上により経済を活性化させるという観光分野の命題がある。春先にだけしか花が咲かない「つつじ」、既に観光地化されて久しく、近年では近隣県の観光スポットとのセット売りがなされる「躑躅ヶ岡」では、その二つの命題をクリアすることはできないという非情な通告であった。

日本遺産挑戦の再考を迫られることになった就任一年目の須藤和臣館林市長は、ここで大胆な決断を下す。まず、所管課の変更である。平成三十年四月にこれまでに館林市史刊行で積み上げた歴史文化や文化財のデータを活かすため、所管を市教委文化振興課市史編さんセンターに移し、市日本遺産プロジェクトを設置した。課長・係長は兼務であり、専属職員はわずか二名であった。そして二つ目の決断は、「つつじ」に拘らずに館林市の魅力を表現する新しいテーマを見出し、そこに「つつじ」を包含させるというものであった。そして、館林市の際立った特徴である「沼辺」を盛り込むという方針が示された。

急造された日本遺産プロジェクトにおいて、申請のチャンスは平成三十一年度（令和元年度）と令和二年度の二回だが、「一発必中」を目指した。市域の文化財や観光スポットなど、日本遺産の構成文化財となりうる要素を洗い出し、分野ごとにグルーピングして一覧にまとめ、「沼辺」「麦」「花・伝説」の三ストーリーを構築し、それぞれに概念図を作成し

た。「上野三碑」のユネスコ「世界の記憶」登録に中心的な役割を果たした前澤和之氏にも助言を仰ぎストーリーの検討も進めた。日本遺産の壁は高く、文化庁にも赴き幾度もストーリーを提示しては辛口なご意見を賜り、認定という目標を見失いかけた時期もあった。しかし、それでも日本遺産プロジェクトでは、認定に向けての用意周到で地道な努力は欠かさなかった。一つ一つの構成文化財をその目で確認し、歴史や由緒を丁寧に追った。また、構成文化財の関係者との直接面談を通してアイデアを得るとともに、認定後のまちづくり推進のための協力者となりうる学識経験者や民間企業・団体、地域活動者を訪問し、良好な関係構築に努めた。既に認定されているストーリーを全て分析し、タイトルの付け方からストーリーの展開、認定獲得の傾向と対策を練っただけではなく、近隣の埼玉県行田市、栃木県足利市・宇都宮市、山梨県甲州市、富山県高岡市など先進地を実際に訪問し、日本遺産担当者から認定に向けた貴重な情報・助言を得た。

申請〆切が徐々に迫るなかで十月頃には日本遺産プロジェクト内でのアイデアも枯渇気味になり、ストーリー修正も行き詰まりを感じるようになっていた。偶然にも十月下旬に須藤市長がSDGs関連のイベントで「館林市の沼」をプレゼンテーションすることになり、そのシナリオ作成の仕事がプロジェクトに回ってきた。文化庁協議の際に言われた「市域に沼がたくさん残っているのは何故なのか?」「それぞれの沼は何が特徴で、どう違うのか?」という指摘を意識しながら、茂林寺沼＝〔祈りの沼〕、多々良沼＝〔実りの沼〕、城沼＝〔守りの沼〕と命名し、それぞれの沼の歴史文化を全く新しいコンセプトで括った。プロジェクト員の一人が通勤途中に沼の畔を通り、頭に浮かんだ「茂林寺沼＝祈り?」というアイデアを端緒に、他の沼も韻を踏んで「〇り」で冗談半分にまとめたのだが、これが予想以上に反響が大きく、日本遺産申請ストーリーの骨格となっていった。

肝心なストーリータイトルについては、日本遺産プロジェクト内でも侃々諤々の議論を繰り返した。「つつじ」「沼」「麦」を全部入れたタイトルにするという意見もあれば、外国人観光客ウケを狙って「麦都(バクト)・ザ・フューチャー」などという奇を衒った意見も出た。「つつじ」や「麦」は季節性が前面に出るため、やむなくタイトルから外した。そして「沼」をメインに据えるなかで、館林市らしさを表現する言葉、市域の沼々を包含できる言葉を探したところ、日本遺産申請事務と並行して、文化財部局で進めていた館林市歴史文化基本構想策定での議論のなかで、委員のひとりが何気なく呟いた「『里山』という言葉があるけれど、館林の沼って『里沼』と言えるのではないか?」という言葉が思い起こされた。

この「里沼」を日本遺産申請ストーリーのメインタイトルに据えよう。そして、日本遺産制度のインバウンド強化の側面も意識して「里沼」の隣に「(SATO-NUMA)」というローマ字の読み仮名も付して出来上がったのが「里沼(SATO-NUMA) ―『祈り』『実り』『守り』の沼が磨き上げた館林の沼辺文化―」である。「里沼」を主題とすることで、市内に点在する沼を、「茂林寺沼」＝祈りの沼、「多々良沼」＝実りの沼、「城沼」＝守りの沼と位置づけ、それぞれの沼の性格の違い、文化の多様性を記述した点が大きな特色となった。「里沼」を取りあげることで、沼辺の暮らしを拓いた館林市の地域特色をストーリーとして展開することができた(次々頁　資料1参照)。

四　新概念「里沼」の誕生

現在、人と自然の共生する社会の姿として「里山」という概念が国内で浸透している。里山とは、集落や人里に隣接した結果、人間の影響を受けた生態系が存在する山のことで、深山(みやま)の対義語として使われている。宝暦九年(一七五九)の尾張藩の「木曽御材木方」の文書にある「村里家居近き山をさして里山と申候」からきている。昭和三十年代の高度経済成長期以降、里山の自然破壊が問題視され、平成七年(一九九五)頃から全国的に普及した言葉である。近年では、広く自然環境に当てはめて多様な生態系を保全することを目的に、環境省で「里地里山」「里海」という用語を用いている。こうしたことから、館林の沼もまた、①人里近くにあり、人の暮らしや生業に関わっている。②沼特有の多様な動植物が生息しているという観点から、新概念として「里沼」を用いることにした。

沼は古くから日本人の心の中にあり、『万葉集』でも多く読まれている。上野国では、「伊奈良沼」や「可保夜が沼」などを詠んだ万葉歌が知られる。沼は水辺の草木に囲まれてひっそりとした佇まいを持っていたことから、歌枕の「隠沼(こもりぬ)」に代表されるようにもなった。そして、人々が沼に近づき集う中で自然と共生した生業や文化が生まれ、まさに「里沼」となったといえる。しかし、新田開発や近代の都市化の波にもまれ、日本各地にあった「里沼」が消え去りつつある現代では、我が国の貴重な財産といっても過言ではない。

現在、館林市には城沼・多々良沼・近藤沼・茂林寺沼・蛇沼という五つの沼が存在していることは、まさに希少価値といえる。そして、沼の特性を抽出し、日本遺産「里沼」ストーリーの中では、茂林寺沼を〝祈りの沼〟、多々良沼を〝実りの沼〟、城沼を〝守りの沼〟というコンセプトで括り、市内三八個の構成文化財とともにストーリーを展開している。

五　文化庁や審査委員からの評価

当初、文化庁側の審査の中では、館林市の「里沼」の評価はあまり高くなかったと聞いている。「日本文化を象徴するものが沼と言えるのか？」「認定後に地域活性化に成功した認定地がほとんどないなかで、沼で人が呼べるのか？」こうした疑問も多く出ていたという。

しかし、人口減少と少子高齢社会の到来に対して、持続可能な文化財行政を推し進める文化庁のスタンスがあるなかで、館林市が歴史文化基本構想の策定から「里沼」を見出し、日本遺産の中心ストーリーに据えたこと、短期間で地域に存在する指定・未指定文化財を丁寧に掘り下げた結果生まれたストーリーであること、そして「沼」という今までにない視点とストーリーの面白さが徐々に評価され、文化庁内部での一次審査を通過したらしい。

文化庁内部での一次審査と、審査委員による持ちまわりの二次審査を通過して、文句のつけようがないストーリーはそのまま認定のステップに進むが、当落線上のストーリーについては審査委員による直接ヒアリング（最終審査）が実施される。平成三十一年四月十二日に文化庁から、館林市が約二週間後である四月二十四日にヒアリング対象となった旨の連絡が入った。

最終審査（ヒアリング）では、申請自治体の担当職員数名が質疑の場に立つのが定石の中で、館林市は須藤市長・河本榮一館林商工会議所会頭（当時）＋日本遺産プロジェクト職員三名」がヒアリングの場にいた。

このヒアリングでは、事前に審査委員から、「館林にはなぜ沼が残ったのか」という質問が寄せられた。それについて、次のように回答した。

かつて全国には、人びとの暮らしと密接にかかわっていた沼がたくさん存在していたが、平野（低地）にある沼は、植物の繁茂による湿原化から草原化による自然転移、さらに江戸時代には幕府や藩の政策による耕作地の拡大を目的とした新田開発や、近代以降の都市化（工場用地や宅地化）による干拓事業などで、多くの沼が消滅してきた。しかし、館林では、江戸時代、河川の付け替えによる治水対策によって新しい耕地が確保でき、沼の干拓が行われなかったこと、それぞれの沼が人とのかかわりのなかで特色を持ち、人が沼を必要

資料１　里沼（SATO-NUMA）

―「祈り」「実り」「守り」の沼が磨き上げた館林の沼辺文化 ―

⑴　里沼（SATO-NUMA）

館林では、冬の朝夕に白鳥たちが沼から沼へと雁行する光景を目にすることができる。大小の河川が網目のように広がる関東平野には、かつて多くの沼が存在したが、近世以降のさまざまな開発によってほとんどが姿を消し、耕地や工場用地、宅地などに変わった。しかし、館林には茂林寺沼・多々良沼・城沼をはじめ、近藤沼・蛇沼など今も大小の沼が存在し、沼辺を行き交う水鳥たちの良い棲みかとなっている。

利根川と渡良瀬川に挟まれた館林の地形は、標高20mを境に低地と台地からなる。台地に入り組んだ谷から自然に湧き出た水は低地で滞留し、堰き止められて多くの沼が生まれた。その沼の畔に人の手が加わることで、館林の「里沼」の歴史が始まった。

⑵　“祈りの沼”＝茂林寺沼　～里沼の原風景を残す沼～

かつて、河川や沼の水辺には湿地や湿原が広がり、その周りには平地林が見られた。沼や湿原には、鯉や鮒、トンボなどの水生動物や昆虫、菱や藻などの水草や湿原の植物が生息し、沼辺の平地林は狸や蛇、野鳥などの棲みかとなっていた。このような水をとりまく自然環境は、平野の都市部では開発によってほとんど見られなくなっている。しかし、周辺が宅地化された今も、茂林寺沼にはその原風景が残されている。沼辺にはコウホネ、カキツバタ、ノウルシなど希少種の植物が自生し、関東地方でも数少ない貴重な低地湿原となっている。

茂林寺沼には、なぜ今も原風景が残っているのか？そこには、600年前に開山した古刹・茂林寺の存在がある。沼の畔に曹洞宗の信仰の拠点「祈りの場」が生まれることにより、人々の自然を畏怖する気持ちが高まり、「祈りの沼」としての静謐さが受け継がれてきた。いつしか人々は、その沼を茂林寺沼と呼ぶようになった。そして、寺に伝わる貉（狸）の古譚「ぶんぶく茶釜」のなかで、和尚が貉の化身であったり、狸が茶釜に化けるなど、人と動物とのかかわりが今もユーモラスに語り継がれている。

茅葺き屋根の本堂や山門をもつ茂林寺は、その葺き替えに沼茅（葦）を利用してきた。人々は繁茂する葦を刈ることで沼の生態系を維持し、茂林寺沼は「里沼」として人との共生が保たれてきた。今も人々の祈りの姿が途絶えることのない寺と、希少な動植物の棲みかの沼との共存が図られている。

⑶　“実りの沼”＝多々良沼　～“麦都”館林を支えた沼～

多々良沼とその沼辺に細長く連なる松林。そこには「たたら」の地名の由来となった古い時代の製鉄の痕跡と、500年前の開拓者大谷休泊による植林と用水堀開削の歴史が刻まれている。多々良沼は、人々の暮らしを支える生業の場としての「里沼」へと拓かれてきた。

沼からの用水によって潤された田畑は、米と麦との二毛作が可能となり、江戸時代には館林藩から将軍家へ小麦粉が献上されたように、館林は麦の産地となった。明治期になると麦を生かした近代製粉業や醸造業が興り、“麦都”となった館林では、麦を原料とした麦落雁やうどん、醤油が名産品となった。「里沼」による水と大地の恵みは、多々良沼を

「実りの沼」へと進化させ、現代の館林の食品産業の興隆へと結実している。
「実りの沼」は漁労の場としても人々の暮らしを支え、鯰の天ぷらや鯉の洗い、鮒の甘露煮など沼の幸を活かした個性ある食文化をもたらした。長年培われてきた様々な味わいは、里人たちの貴重なたんぱく源となり、もてなしや晴れの日の料理として今も暮らしに根付いている。

⑷ “守りの沼”＝城沼　～城と躑躅ヶ崎を守ってきた沼～

約550年前、東西に細長い城沼を天然の要害として館林城が築かれた。城沼は館林城の建つ台地を取り囲む外堀の役目をし、武将たちにとって「守りの沼」となった。沼によって守られた堅固な城は、近世になると江戸を守護する要衝として、徳川四天王の榊原康政や、五代将軍となる徳川綱吉の城となり、守りを固めるための城下町を広げ、その周囲に水を引き入れ、堀と土塁で囲んだ。
「守りの沼」には、二つの伝説が生まれた。一つは龍神伝説である。沼に人を寄せつけないため、城沼は沼の主（ぬし）・龍神の棲む場となり、城下町にはその伝説を伝える井戸が残る。もう一つはつつじ伝説である。今から400年程前、「お辻」という名の女人が龍神に見初められ、城沼に入水した。それを悲しんだ里人は沼が見える高台につつじを植え、その地を「躑躅ヶ崎」と呼んだ。歴代の館林城主はそこにつつじを植え続け、花が咲き誇るようになった高台を築山に、城沼を池に見立てた雄大な回遊式の大名庭園を造り上げた。城主によって守られてきた躑躅ヶ崎は「花山」とも呼ばれ、花の季節には里人たちにも開放された。
明治維新後の近代化は、「守りの沼」を大きく変貌させた。江戸時代に禁漁区となって人を寄せつけなかった城沼は、里人たちに開放されて漁労や墾田、渡船などが営まれ、「里沼」としての歴史を歩み始めた。

⑸ もてなしの里沼文化　「もてなしの心」へと磨き上げられた館林の沼辺文化

近代化による「守りの沼」の変貌は、城沼と景観を一つにしていた「躑躅ヶ崎」も大きく変えた。それまで城主によって守られていた「躑躅ヶ崎」は、町人や村人たちの努力によって、公園「つつじが岡」として行楽地に生まれ変わり、400年前に植えられたつつじは貴重な古木群となり、名勝として甦った。多くの人々が訪れるようになった沼辺には、行楽客を迎え入れるための文化が集約され、「もてなしの心」が芽生えた。
近代化によって城下町で成長した製粉・醤油醸造・織物などの会社は、内外の客を迎えるもてなしの場として「つつじが岡」を利用した。東武鉄道の開通と館林出身の文豪田山花袋が記した旅の案内書は、沼辺にある「つつじが岡」と茂林寺へと多くの人々を誘った。さらに「実りの沼」がもたらした名産品の麦落雁やうどんは、手軽な館林土産として広く知られるようになり、里沼の特性を活かした「もてなしの心」が根付いた。
館林の沼辺に佇むと、赤城山や日光連山、遠くは筑波山・富士山を眺望できる。「祈りの沼」「実りの沼」「守りの沼」、それぞれ特性を持って、多彩な文化を生み出してきた館林の「里沼（SATO-NUMA）」。その特性は明治の近代化以降、「もてなしの心」へと磨き上げられ、館林の沼辺文化として今も受け継がれている。

としていたという歴史的な背景がある。それが、今回のストーリーの骨格である、信仰の場としての「祈りの沼」、生産の場・自然の恵みとしての「実りの沼」、要害と伝説の場としての「守りの沼」となった経緯を説明した。

また、審査委員らは、地域活性化が成功している既認定地がほとんどない中で、日本遺産申請が文化財部局のような自治体の一部局だけでの動きではなく、今後まち全体がダイナミックに動いていく可能性の有無を確認したく、そうした質問もあった。この時、須藤市長は構成文化財「川魚料理」のひとつである鯰を使った「ナマズバーガー」の開発や、カヌー・カヤックなど新たな沼の体験プログラム、沼周辺でのカフェをはじめとする憩いの場創出の構想を語った。一方で、河本会頭は館林市「里沼」認定後は商工会議所や観光協会、市民団体などがオール館林市となって全面支援することを確約した。この両名の決意表明により、ヒアリング後の委員協議の中で「認定」を決定づけるものであったことは、後日審査委員の一人から耳にした話である。

こうして館林市は令和元年度「日本遺産」認定を勝ち取ることになったが、文化庁や日本遺産審査委員からはいくつか宿題も課せられた。それは、まず日本文化や歴史における「沼」の研究がほとんどないことから、館林市発信で「沼」や「里沼」の研究・普及を進める活動を展開すること。また、日本遺産「里沼」を目的に来訪した人々が、それぞれの沼の特徴やストーリーを理解できるような着地型解説（ガイドや解説サイン等）の整備を進めること。そして、日本遺産「里沼」申請書としてストーリーとともに提出した日本遺産補助金を活用した今後の館林市の地域活性化計画を実直に遂行することが求められた。

六　今後のまちづくりへのアプローチ

館林市は地域活性化計画の中で、この日本遺産「里沼」を活用して、「沼辺」＋「イノベーション」＝「ヌマベーション」を新たなキーワードとした持続可能なまちづくりの実現に向け、次の三つの目標を立てている。

〔目標1〕「里沼」の継承・発展
館林市の沼辺文化を生んだ「里沼」環境や歴史文化が適切に保存・継承し、観光・産業や人材育成などのまちづくり面での活用・発展が促進します。

〔目標2〕シビックプライドの醸成
館林市内に各分野の組織・団体の新たな連携体制が構築しながら、各事業がブラッシュアップし、地域住民の中にシビックプライドを醸成します。

〔目標3〕交流人口の増加
「日本遺産」を通じて館林市への来訪者のみならず、他地域・他国との交流が活発になり、交流人口が増加させます。また、市民一体となった「もてなしの心」により、満足度を向上させリピート来訪を増やします。

「日本遺産」認定により「たてばやしの里沼」という地域ブランド化に成功した。これにより、館林市内の特定のエリアや分野ではなく、全市民が気軽に参画できる土壌が生まれた。各分野の人・組織・団体とその事業を、日本遺産「里沼」という〝横串〟でつなぎ、各事業をさらに磨き上げながら地域の魅力を国内外に発信したいと考えている。

「里沼」を学術的に深め、学校教育や生涯学習の場などを利用して普及啓発を図る。また、「里沼」の持つ魅力を次世代に継承するため、自然環境保全のための活動や施設整備等の充実・向上に取組む。「里沼」の魅力を体感できるプログラムを〝コト消費〟として創出しながら、交流人口増加から将来的な定住人口増加につなげて行く。そして、これまで単体で動いていた商業・工業・農業についても、日本遺産「里沼」認定を契機として、地域特色である「食」を中心とした相互連携を図って行くものである。

ここで認定初年度である令和元年度の主な取り組みについてご紹介したい(表1参照)。

令和元年度の各種事業実施を通して感じたことは、館林市の市民にとって「日本遺産」というブランドが与えた影響は非常に大きく、自分たちの住んでいるまちの歴史文化、生業や産業、風景や名産品といったものが評価の対象であったことに気づくきっかけとなり、各々が自信と誇りを取り戻すことができた。とあるボランティア活動に参加するかたが「今まで館林市には自慢できるものは何もないと思っていたが、間違いだった。私達には沼が育んだ文化がある。今後はこれをたくさんの人に知ってもらえるように勉強しながら、他者

①

②

③

④

⑤

⑥

表１　令和元年度（日本遺産認定初年度）の日本遺産「里沼」関連事業

実　施　月	事　業　概　要
３月～９月、 12月～２年１月	館林市第一資料館企画展「里沼物語」開催
６月	館林市「日本遺産」推進協議会設立
６・９月、２年１月	里沼散策講座（城沼・茂林寺沼・多々良沼）開催
７月	館林まつりパレード PR 実施　写真①
９・10月	里沼カヌー体験ワークショップ実施　写真②
10月	「日本遺産サミットin高知」参加
11月	日本遺産「里沼」パンフレット発行
11月	インバウンドニーズ調査実施　写真③
12月	「着物でお茶席体験」ワークショップ実施（茂林寺）
12月	東京電機大学との連携事業（城沼散策マップ作成ワークショップ）
12月、２年１月	里沼ランドナビゲーター育成講座開講
１月	かるがも笛ワークショップ実施（堀工町のどんど焼き）
１月	歩道橋への横断幕設置
２月～３月	つつじが岡ふれあいセンター展示会開催　写真④
２月	多々良沼野鳥観察棟展示会開催
２月	「里沼」シンポジウム開催
２月・３月	「里沼」PR ツール（幟旗・タペストリー・QR ステッカー）市内設置
３月	「里沼」WEB サイト開設
３月	茂林寺展示会開催
３月	館林市第二資料館モスリン「里沼」展示会開催
３月	里沼 PR プリントトラック車両運行開始　写真⑤
３月	館林駅東口への日本遺産「里沼」サイン新設　写真⑥
３月	茂林寺沼・多々良沼・城沼への日本遺産「里沼」サイン新設
３月	構成文化財「上三林のささら」説明板新設
３月	「里沼」オリジナルフレーム切手発売
３月	「里沼」観光ガイドブック発行
３月（公開６月～）	つつじ映像学習館「里沼」新作映像制作
随時	「里沼」関連商品開発支援
随時	「里沼」公式 Twitter による情報発信

や後世に伝えて行きたい」と笑顔で語っていたのが印象に残っているが、こうした話は一度や二度ではなかった。

館林市民や所縁のある人たちにとっては、空気のような存在であった「沼」の価値を再認識することによって、民間企業による新商品・サービスの開発や、行政や市民活動における新たな展開が着実に始まっている。まちの中ではあちらこちらで「里沼」という文字を目にし、今日もまた館林市では活気あふれる「里沼」を活かしたまちづくりが行われている。

おわりに

本来であれば、今夏開催されるはずだった東京オリンピック・パラリンピックに合わせて、国内外の来訪者をお迎えするために、館林市「里沼」でも多彩なＰＲイベントやワークショップ等を準備していた。しかし、新型コロナウイルス感染症による昨今の騒動により、実施を見送った。館林市「里沼」を世界に発信する好機を失った無念さがある一方で、地元や近隣の人々が引き籠り生活からのひと時の癒しを求めて、館林市の「里沼」に足を運んでいたようで、あまり大きい声では言えないが、例年の倍もの人数が集まってしまい、慌てて公園部分や駐車場を閉鎖するなどの対応がとられた。言い換えると、人類の危機的状況の中においても、館林市の「里沼」は不変の価値を有し、多くの人々の心の拠り処となっていたのであり、「里沼」ストーリーのとおり、人と沼が共生していた文化が実証されたわけで、その点が確認できたことは、闇夜の中の一筋の光を掴んだと言えよう。読者の皆様もぜひ一度、館林市を訪れ、「里沼」が育んだ色鮮やかな歴史文化を体験していただければと考えている。

最後になるが、本誌を通じて日本遺産「里沼」周知の機会をご提供くださった群馬県地域文化研究協議会の前澤和之会長に心より感謝申し上げる次第である。日本遺産「里沼」事業は令和五年度まで継続することから、今後も進捗状況や館林市の新しいまちづくりの成果について読者の皆様に胸を張って報告できるよう、事業に取組んで行きたい。

（館林市教育委員会文化振興課［館林市日本遺産プロジェクト］）